

北海道の思い出 松田裕子

三姉妹で北海道を旅した時の思い出を匂にしました。当時は、目を五十代。まだまだ元気、三人で交代しながらレンタカーを運転し、北海道の広い大地と壮大な景色に魅了された四日間でした。しかし、その一年後、妹は亡くなりました。あの時の妹の楽しそうな笑顔は、今もはきりと脳裏に焼き付いています。

夏霧の空港に立つ三姉妹

夏暁の北海道の大地踏む

峰雲に向かつて走るレンタカー

額寄せ夏野に開く旅の本

知床のお花畑を右に見る

夏の野にあまたの蝶の飛び交ひて

馬鈴薯の花一面に驟雨かな

夏霧の途切れて蒼き十勝岳

湯けむりに北狐見る夏の宿

いもうとの寝息間近に夏の月

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

空港に降り立つことから旅は始まり、大地に広がる夏野、お花畑、山、そして北狐と、北海道の大自然の様子がよく伝わってきます。

亡くなられた妹さんとの楽しい思い出、どの一瞬も忘れず心の中の妹さんと一緒に生きてこられ、今、この十句に甦りました。

夏暁の北海道の大地踏む

夏の夜明け、大地に一步を踏み出す。この句は「夏暁」の季語によって北海道の大地の広がりや力強く表し、これから始まる旅への期待を感じさせます。

額寄せ夏野に開く旅の本

夏野に来て、次はどこへ行こうかと本を開く。さぞかし三人で笑ったのでしょうか。「額寄せ」に子どものように仲の良い姉妹の姿が浮かんできます。

いもうとの寝息間近に夏の月

その頃妹さんは病をお持ちだったのか、その健やかな寝息を間近に聞きながら遠くの「夏の月」を見る。作者の気持ちに引き寄せられました。

十三回忌

森口良樹

母が亡くなってから、今年の四月で十三回忌を迎えた。コロナ禍の中、法要を行うかどうか苦慮してやっと思時を決めたところで、兄がコロナに感染し、急遽、日時を変更することになった。幸い兄も軽症で退院することができ、平常な生活をとり戻したが、このようなことがあって、自分勝手に仏壇に家族の安寧をお願いしていることに気づいた。来たる盆には、先祖の霊に感謝と礼を尽くしたい。

ぐい呑みを墓前に買うて草の市

朝市に探して回る蓮の花

小流れに野菜を洗ひ魂迎

父とまた海見たくなり墓参り

新しき簾片手の墓参り

墓越しにだれか会釈す墓掃除

墓に羽休めて去りぬ赤とんぼ

一坡を待ちて流せる絵灯籠

手は父似腰は母似の踊かな

星月夜母の浴衣に手を通す

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

お母様の法要を準備する作者の気持ちや振る舞いに、親子の繋がりの尊さ、不思議さを思いました。私も両親を思い出し、深く感じながら読ませていただきました。

また、人が伝え行ってきた盂蘭盆会に関わる季語の本当の趣を教えていただきました。心から感謝しています。

朝市に探して回る蓮の花

売っていたとしても数少ない蓮の花、一生懸命に探す姿が目に見え、心を尽くして法要の準備をしているのです。

父とまた海見たくなり墓参り

海の見えるお墓にお父様もいらっしやるのでしよう。昔のように、またここから一緒に海を見たいと思っただけで墓参りに行くのです。

星月夜母の浴衣に手を通す

亡くなった母の浴衣に手を通してみる、そこには居ない母を感じたい気持ちがよく詠まれています。

季語「星月夜」が、母への思いと時の流れを感じさせてくれます。